言語文化教育研究学会

第 33 回月例会

英国の演劇教育理論を導入した市民性育成のための日本語教育

―英国公立小学校での実践報告―

発題者：福島青史（元国際交流基金ロンドン日本文化センター　日本語教育チーフアドバイザー）
飛田勘文（桐朋学園芸術短期大学演劇専攻非常勤講師）

第33回月例会では発表者が2014年11月~2015年1月に、6回にわたって英国ロンドンの公立小学校（4年生）で行った「英国の演劇教育理論を導入した市民性教育のための日本語教育」について報告します。英国では2014年9月から初等教育段階での外国語教育が必修となり、発表者の一人である福島は2013年10月より小学校の現場で日本語教育の実践をしながら教材を作成してきました。英国の教育現場での経験から、英国の初等教育における日本語教育は語学教育というよりむしろ市民性育成を目的としたほうが適切であると考え、CEFR、Content and Language Integrated Learning (CLIL)などを参考にしながら、教材を作成しました。その際、英国の大学で演劇教育の博士号をとったもう一人の発表者である飛田と出会い、英国の演劇教育の理論が市民性教育としての日本語教育に利用できるのでは考え、1年ほどの議論と準備を経て 6 回の実践をすることができました。

1950年代以降、英国では、演劇が教育方法として積極的に用いられています。その発展のなかで、英国の研究者たちは、演劇の表現とその表現に対する理解の問題や、認知能力と非認知能力（コミュニケーション能力、共感的理解、創造力など）の育成の問題を取り上げてきました。1990年代には、演劇の手法をシステム化し、各手法の教育的効果について研究を重ねました。本テーマとの関係で言えば、ナショナル・カリキュラムにおいて、演劇が国語（英語）の一部に位置付けられていることから、研究者らは、社会言語学やクリティカル・リテラシーの観点から演劇と言語の関係を探りました。また、市民性教育が導入されて以降は、ラディカル・デモクラシーの理論を基盤にして演劇教育の理論を構築・展開しています。よって、今回の事例は、語学教育、演劇教育、市民性教育の接点における実践であると言えます。

月例会では、①「なぜ、英国の初等教育の日本語教育が語学教育ではなく市民性教育なのか」②「英国演劇教育の概要と言語教育との接点」、③「『泣いた赤鬼』を利用した日本語教育実践と演劇的手法の実際」とし、教室場面の映像なども加えて紹介したいと思います。

この教育実践はたった一回しか行われず、課題の多いものですが、日本の初等教育における外国語教育や年少者教育について考えたり、日本語教育における従来のスキットやシナリオ・ドラマとは異なる演劇的手法のバリエーションを考える機会となればいいと考えています。いろいろな現場、教育理念を持つ皆さんの参加をお待ちしています。

日時：6 月 26 日（金）18:00～19:40
場所：早稲田大学　早稲田キャンパス　22 号館 601 教室
参加費：無料　予約：不要
当日、直接会場にお越しください
問い合わせ：monthly@alce.jp

ALCE 言語文化教育研究学会
Association for Language and Cultural Education